ドールマン 上

テイラー・スティーヴンス
北沢あかね 訳

TAYLOR STEVENS

講談社文庫

講談社文庫

ドールマン(上)

テイラー・スティーヴンス｜北沢あかね 訳

講談社

|著者| テイラー・スティーヴンス 「神の子」組織の中で誕生。普通の教育を受けないままカルト集団の働き蜂として育つ。世界中を放浪した経験を元に描かれた『インフォメーショニスト』（上・潜入篇／下・死闘篇、講談社文庫）でデビュー。一躍「ニューヨーク　タイムズ」のベストセラー作家となり、本作は17ヵ国語で翻訳されている。最新作はヴァネッサ・マイケル・マンローのシリーズ『THE CATCH』。

|訳者| 北沢あかね　神奈川県生まれ。早稲田大学文学部卒業。映画字幕翻訳を経て翻訳家に。訳書に、ジョハンセン『嘘はよみがえる』、ハンドラー『ブルー・ブラッド』『芸術家の奇館』『シルバー・スター』『ダーク・サンライズ』『ゴールデン・パラシュート』、シュワルツ『湖の記憶』（以上、すべて講談社文庫）、ヴォネガット『トップ・プロデューサー』（小学館文庫）などがある。

ドールマン(上)

テイラー・スティーヴンス | 北沢(きたざわ)あかね 訳

© Akane Kitazawa 2014

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2014年7月15日第1刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話 出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社デジタル製作部
印刷———豊国印刷株式会社
製本———株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。
本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277880-0

ドールマン　上　目次

1　テキサス州ダラス――9
2　――22
3　――34
4　高度二万九千フィート、メキシコ湾岸上空、米国空域――46
5　テキサス州ダラス――50
6　クロアチア、ザグレブ――69
7　――86
8　――103
9　テキサス州ゲイツビル――108
10　クロアチア、ザグレブ――129
11　テキサス州ダラス――140
12　テキサス州アーヴィング――154
13　――163

14　テキサス州アーヴィング――174
15　クロアチア、ザグレブ――185
16　――198
17　テキサス州ダラス――212
18　スロベニア、ミレン＝コスタニェヴィツァ――231
19　テキサス州ラス・コリナス――244
20　イタリア、プローバ――264
21　イタリア、ヴェローナの西――280
22　テキサス州アーヴィング――297

（下巻目次）

23　イタリア、モンテブルーノ郊外／24　テキサス州アーヴィング／25　イタリア、モンテブルーノの先／26／27／28／29　フランス、ペイユ、ル・ガヤン郊外／30／31／32／33／34／35／36／37／38／39／40　テキサス州ヒューストン／41　イタリア、ミラノ／42／43／44　テキサス州ダラス／45　テキサス州ダラス　五ヵ月後／謝辞／訳者あとがき

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

講談社文庫

ドールマン(上)

テイラー・スティーヴンス｜北沢あかね 訳

講談社

THE DOLL
by
TAYLOR STEVENS

Copyright © 2013 by Taylor Stevens
Japanese translation rights arranged with Crown Publishers,
an imprint of the Crown Publishing Group,
a division of Random House, LLC.
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo.

もうひとりのブラッドフォードへ、変わらぬ愛と感謝を込めて。

ドールマン　上　目次

1　テキサス州ダラス――9
2　――22
3　――34
4　高度二万九千フィート、メキシコ湾岸上空、米国空域――46
5　テキサス州ダラス――50
6　クロアチア、ザグレブ――69
7　――86
8　――103
9　テキサス州ゲイツビル――108
10　クロアチア、ザグレブ――129
11　テキサス州ダラス――140
12　テキサス州アーヴィング――154
13　――163

14　テキサス州アーヴィング――174
15　クロアチア、ザグレブ――185
16　――198
17　テキサス州ダラス――212
18　スロベニア、ミレン＝コスタニェヴィツァ――231
19　テキサス州ラス・コリナス――244
20　イタリア、プローバ――264
21　イタリア、ヴェローナの西――280
22　テキサス州アーヴィング――297

（下巻目次）　23　イタリア、モンテブルーノ郊外／24　テキサス州アーヴィング／25　イタリア、モンテブルーノの先／26／27／28／29　フランス、ペイユ、ル・ガヤン郊外／30／31／32／33／34／35／36／37／38／39／40　テキサス州ヒューストン／41　イタリア、ミラノ／42／43／44　テキサス州ダラス／45　テキサス州ダラス　五ヵ月後／謝辞／訳者あとがき

●主な登場人物（上巻）

ヴァネッサ・マイケル・マンロー　情報収集を生業とする女。カメルーン生まれで両親はアメリカ人

マイルズ・ブラッドフォード　保安警備会社「キャップストーン」経営。公私ともにマンローのパートナー

ポール・ジャハン　37歳。ブラッドフォードの部下。IQ152の天才

サマンサ・ウォーカー　26歳。ブラッドフォードの部下。ブルネットの美人

ケイト・ブリーデン　マンローの元ビジネスパートナー、弁護士。現在服役中

ローガン　マンローのバイク仲間、仕事のよき協力者

ドールマン　60代後半らしき男。身長が低い。人形収集を趣味とする

ヴァロン・ルマーニ　ドールマンの甥で、仕事の右腕

アーベン　ドールマンの部下。傷痕がある

ジェレミー・ジャスティン　ビルの警備員

ニーヴァ・エクリッジ　新進女優

ヘンリー&ジュディス・ティスデイル　シリコンバレーの巨人と上院議員。ニーヴァの両親

デイヴ・ロックリード　トラック運転手

タビサ　マンローの一番上の姉

アレクシス　タビサの娘

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

ドールマン　上

1

テキサス州ダラス

マイルズ・ブラッドフォードがオフィスの窓に両手をついて、駐車場を見守っていると、彼女が倒れた。スローモーションのような倒れ方。笑うべきか、心配すべきか、ブラッドフォードはしばしためらった。息を凝らして、早く起き上がれよと彼女をせき立てた。今にも彼女は、彼がここにいるのに気がついて、建物を見上げて手を振る。そして一緒にあとで笑うのだ。

しかし、彼女は動かない。片脚に載ってしまっているバイクの下から這い出ようとしない。頭を上げようともしない。

はっきりとはわからないまま、ブラッドフォードは水の中を歩くような動きで窓か

ら離れた。そして、くるりと向きを変えると、オフィスを飛び出し、廊下を走り、受付を走り抜けた。エレベーターを無視して階段へ。五階から駆け下りて、階段室からロビーに出た。大きなガラスドアを押して外に出ると、救急車が北駐車場の出入口をふさいでいた。ストレッチャーに載せられたマンローが運び込まれるところだ。

ブラッドフォードは大声をあげ、腕を振り回して、救急救命士の注意を引こうとした。駐車場に行くまで少し待ってもらえれば、彼女と一緒に救急車に乗り込める。でも、彼らは振り向かず、見ようともしなかった。ストレッチャーは内部に収まり、ドアが閉まった。ブラッドフォードは再び駆け出して、大急ぎでそばまで行ったが、間に合わなかった。

救急車はサイレンを轟かせて、側道に出ていった。

ドゥカティは横倒しだ。彼女を下敷きにしていた場所から少し押しやられている。エンジンは切れているが、キーはイグニッションに挿したままだ。ブラッドフォードはかがんで、バイクを起こした。バイクにまたがり、足でギアをニュートラルに入れ、親指でスターターボタンを押してクラッチハンドルを操作したが、コンクリートの床に倒れた衝撃で壊れてしまっていた。

悪態をついて、救急車が走り去った方向をじっと見た。サイレンが遠くなり、車が

再び流れ出す間、苛立ちに身を固くして、息を継ぎ、状況を考えた。救急車ではなく自分の車に向かって走っていれば、救急車を追いかけるチャンスがあったかもしれないが、いまさら思いついても遅い。建物をちらりと振り返った。そこそこ集まっていた見物人はもう散り出している。

二十年間、危険に身をさらし、背後を警戒しながら闇の中の影を追ってきたが、自分の専門分野のことでもまだ一般市民のように考えるところがある。一階にいた人間が電話をかけ、救急車がすぐ近くにいた可能性はどれくらいあるだろうか？　ないとは言えないが、まずあり得ない。

ブラッドフォードはドゥカティを降りて、ガレージに押していった。いかにもマンローらしい隅の隠し場所に。それから、小走りにロビーに戻りながら、頭の中で彼女が倒れるシーンのテープを再生した。彼女は急に動いて、ちょっと下を見た。そこで動きを止め、左手が腿のあたりに移動した。しばらくして彼女はバイクから落ちて倒れた。あれ――急に落ちて倒れた――は失神した者の動作ではない。

エレベーターまで来ると、上昇の矢印ボタンを指でぐっと押し、可能な選択肢のリスト――アレルギー、健康状態、最近の病歴――をざっと思い浮かべたが、どれも当てはまらなかった。

自分のフロアに戻る頃には、十回以上も再生を終えていた。巻き戻す度に、苛立ちは募った。廊下とキャップストーン保安コンサルティングを隔てる大きなドアを押して入り、豪華な受付エリアを横切った。高価な備品と、特大のロゴ――凶暴なチームではない何かを仄めかす、壁板の向こうにある会社の象徴――がある。ブラッドフォードは受付の机の前でぴたりと立ち止まった。受付にはサマンサ・ウォーカーが座っている。

ウォーカーが大きなブラウンの瞳で彼を見上げた。彼のストレスレベルが急上昇した時に必ず見せる、戦況報告してよという顔だ。「いったいどうしたの？　死神が訪ねてきたみたいな顔をしてるわよ。私に話して」

ブラッドフォードは虚ろな薄笑いを浮かべて彼女を無視すると、机越しに身を乗り出して、付箋の束を取った。他に何ができるだろう？　直感とエンドレスに繰り返される十秒間の記憶から、愛する女性がいましがた薬物を盛られ、救急車に押し込まれたのは間違いないと話すのか？

ブラッドフォードは救急車が側道に向かって急発進した時に読み取ったナンバープレートの数字をいくつか走り書きすると、そのまま付箋から目を離さずに言った。

「ここから一番近い緊急救命室はどこだ？」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com